Photo: Gogo

20年ぶりの旧交を温める二人。それぞれ立場が変わった今も二国間の協力に携わっている。

語る人

モンゴル国 建設・都市計画大臣
ツェレンピル・ダワースレンさん（右）
Tserenpil Davaasuren

現・大蔵省勤務を経て2008年から現在まで国会議員。17〜20年にエネルギー大臣、22年より現職。1997〜98年、埼玉大学で経済学修士号を取得。2001年、JICAの研修で来日。

JICAモンゴル事務所次長
吉村徳二さん（左）
YOSHIMURA Tokuji

1990年代にモンゴル人文大学に留学。2001年、ダワースレンさんと出会う。キルギス共和国事務所、産業開発・公共政策部、JICA関西、管理部を経て19年より現職。

JAPAN-MONGOLIA FRIENDSHIP

半世紀の協働で深めた日本とモンゴルの絆

2022年に外交樹立50周年を迎えた日本とモンゴル。JICAの本邦研修で知り合ったJICA職員と今は大臣となった研修員が、約20年ぶりにモンゴルで再会。両国の協力関係とモンゴルの未来について語り合った。

2023年12月。モンゴル国建設・都市計画省の大臣執務室は、和やかな空気で満たされていた。笑顔交じりに言葉を交わすのは、大臣のダワースレンさんと、JICAモンゴル事務所次長の吉村徳二さん。吉村さんが当地へ着任したのは４年前。だが、二人の出会いは22年前にさかのぼる。

大蔵省の国庫局長だったダワースレンさんがJICAの課題別研修に参加するため来日したのは01年のこと。JICA東京国際研修センター（当時）で研修を担当していたのが、学生時代にモンゴル語を専攻し、モンゴルへの留学経験もある吉村さんだった。研修時間以外のプライベートでも一緒に食事をするなど交流を深めた二人。「大臣はモンゴル人研修員のリーダー的存在でした。国の課題や将来あるべき姿について語っていたのを鮮明に覚えています。深い分析力と論理的思考を兼ね備えた人。そんな印象でした」と吉村さんは当時のことを振り返る。

モンゴルにおける日本のODAは、1972年の国交樹立後にスタートした。最初の案件は５年後、国内産業の育成を目指した無償資金協力による「ゴビ・カシミヤ工場建設」プロジェクトだった。当時のモンゴルは社会主義国で、日本との往来も今ほど自由にはできない時代。そんなか「モンゴルの技術者を研修員として招き入れ、カシミヤ製品に関する日本の技術を学んでもらったと聞いています。その後、同国のカシミヤは国際市場で評価され、ブランド化に成功しました。今では国の基幹産業のひとつ。貴重な外貨の収入源となり、経済成長にも大きく貢献しました」と吉村さん。

モンゴルが市場経済に移行し、民営化や財政引き締めなどを推進した結果、失業者の増加や貧富の差が拡大。日本政府は世界銀行とともに国際社会に支援を呼びかけ、ODAも本格化する。吉村さんが留学していたのはそんな時代だ。留学中、日本との深いつながりを知る機会が何度もあったという。たとえばエネルギーに関すること。市場経済化した当時の首都ウランバートルは電力が足りず、地区ごとに計画停電をせざるを得ない状況だった。その原因は、市内の約６割の電力を供給していた第４火力発電所の人手不足にあった。社会主義体制の崩壊後、仕事に従事していたロシア人技術者が国に引き上げたため、操業がおぼつかない状況になっていた。さらに、ロシアからの電力輸入も停止されていた。冬は気温がマイナス40℃にもなる街で、電力不足は死活問題だった。

「第４火力発電所が止まれば、ウランバートルが凍ってしまう。そんな危機的状況に手を差し伸べてくれたのが、日本のODAでした。設備の改修や更新、熟練エンジニアのJICAボランティア派遣などの支援を受け、発電所の操業が安定していったのです」とダワースレンさんは振り返る。吉村さんは「当時現地の方から『日本の支援がとても役に立った』とよく声をかけられました」と話す。

1 日本の協力で導入された「ブルーバス」。車庫や車両の整備・修理工場も建設された。2 首都ウランバートルを中心に、日本はこれまで59の初等・中学校校舎の新設・増設を行っている。3 国内最大の発電容量を誇るウランバートル第４火力発電所。JICAは設備の改善、維持管理、人材育成などで協力を実施。4 2021年に開港したチンギス・ハーン国際空港。

もっと知りたいモンゴルへの協力
多彩な取り組みをJICAのFacebookでチェック

東日本大震災時に届いたモンゴルからの多くの支援

それから「日本の国旗をつけて走るブルーバスも印象的だった」と吉村さん。「懐かしいですね。伝説のバスとして、今でもモンゴル国民の記憶に刻まれています」と返すダワースレンさん。都市化が進むウランバートル市内の公共輸送力を強化するため、94年から95年にかけて日本が供与したのが、青い車体の日本製バス。ブルーバスとして親しまれたこのバスの平均走行距離は100万km以上。丈夫で快適なバスとして10年以上にわたり市民に愛された。「さすが日本品質、とお褒めの言葉をたくさんいただきました」と吉村さんは思い出を語る。

モンゴルと日本の関係は、一方的な支援にとどまらない。「東日本大震災のとき、日本に対して多くの支援をいただきましたね」と吉村さん。ダワースレンさんは「苦難のときこそ友人の人格がわかる、という言葉がモンゴルにあります」と語る。「大震災の際、レスキュー隊を初めて国外に派遣しました。また、モンゴル国民からも多くの義援金が集まりました。我々がいちばん苦しいときに支えてくれた恩を感じていたからでしょう」

近年も、チンギス・ハーン国際空港の建設に日本が協力するなど、関係を深める両国。「日本には技術があり、わが国には資源がある。技術と資源をうまく活用すれば、より良い協力関係が築けるはず」とダワースレンさん。一方で「モンゴルが大好き。JICAを就職先に選んだのも、モンゴルに恩返しをしたかったから」と語る吉村さん。談笑する二人の視線の先にあるのは、信頼関係を生かしてともに発展を続けるモンゴルと日本の姿だ。